

## 参加・体験型博物館における学習者の 主体性に関する一考察

瀧 端 真理子

### A Study of Independence of Visitors to Participatory Museums

Mariko TAKIBATA

#### 要 約

文部省の「教育改革プログラム」では、「参加体験的な展示の開発やハンズ・オン活動」の支援がうたわれている。参加・体験を展示という枠の中に設定しているのであるが、本来の意味での参加・体験とは、伊藤寿朗が「第三世代の博物館」論で主張したように、運営面にまで市民が参加することを指すはずである。現在の日本の参加・体験型展示やハンズ・オン活動を生み出したきっかけの一つは、アメリカおよびイギリスにおける科学センターおよびチルドレンズ・ミュージアムの成功例が、1990年代に日本に紹介されたことにある。日本の博物館史を見ると、すでに1912年に、棚橋源太郎が東京高等師範学校附属東京教育博物館内の通俗教育館で、「触れる展示」を導入している。日本初の「触れる展示」は、社会教育の成り立ち＝生活レベルでの民衆教化の時代、に誕生したのである。また、犬塚康博の研究によって、満州国国立中央博物館において、館外活動を含む教育・普及活動が行われ、当時の日本での博物館観＝「単なるモノの展示場」の否定が目指されていたことが明らかにされている。さらに、現在用いられている意味でハンズ・オンの手法を取り入れた世界初の施設であるエクスポラトリウムは、原子爆弾製造プロジェクトの一員であったフランク・オッペンハイマーが、冷戦期の米国科学技術教育改革の潮流の中で開設したものである。現在の日本においては、ハンズ・オンの手法の紹介が熱心に行われているが、「触れる展示」の歴史的経緯に対する批判的検討は十分にはなされていない。ハンズ・オン展示の導入にあたっては、ハン

ズ・オン展示で楽しく遊び学ぶ来館者が、知らぬ間に権力の中に組み込まれる危険性を孕んでいること、その一方で、展示を主体的に読み解いていく来館者の「勝手な」解釈が存在すること、の二点をまず踏まえなければならない。本稿では、安易なハンズ・オン展示の導入を「参加・体験型」と呼ぶ動向に反省を迫るものとして、大阪市立自然史博物館における、友の会を拠点とする積極的な市民参加の一事例を取り上げた。ここでは、友の会主催行事の一つである合宿の持ち方を巡って、友の会評議員と学芸員の間で活発な議論が展開されている。市民の側からの意志表明を可能としているのは、友の会が、館の前身である「大阪市立自然科学博物館」の後援会としてスタートし、博物館活動を市民が支えてきたという経緯と、館の学芸スタッフによる、教育普及活動に対する明確な方針の存在である。市民の側は、与えられた「参加・体験」で満足するにとどまらず、自らの意志を博物館活動に反映しうる存在に成長する必要があるのである。

キーワード：参加・体験型博物館，ハンズ・オン，エクスプロラトリウム，棚橋源太郎，来館者の解釈，大阪市立自然史博物館友の会

## はじめに

今日、博物館に関連して注目を集めている用語に「参加・体験」「ハンズ・オン」「インタラクティブ」という用語がある。文部省は2002年度の完全学校週5日制の実施に向けて、「地域で子どもを育てよう緊急プラン〈全国子どもプラン〉」を制定し、1999年度から博物館を対象とした事業として、「親しむ博物館づくり事業」を実施している。この事業では、「参加体験型やハンズ・オン活動、博物館の館外活動（アウトリーチ活動）等」の先導的取り組みについて、全国の博物館からアイデアを募集し、優れた事業の研究開発及びその成果の普及を博物館に対し委嘱している<sup>1)</sup>。また、文部省が1999年に発表した「教育改革プログラム」でも、「社会教育施設等の活性化」の項目の中で、「参加体験的な展示の開発やハンズ・オン（自ら見て、触って、試して、考えること）活動」を支援することが明らかにされている<sup>2)</sup>。ここで問題となるのは、何をもって「参加・体験」と呼ぶかである。

こうした政策動向を生み出したきっかけの一つとなったのは、アメリカやイギリスにおける科学センター及びチルドレンズ・ミュージアムの成功例であり、1990年代にこれらの成功例が、日本にも紹介された影響が大きい<sup>3)</sup>。代表例として、日本でよく取り上げられるのが、エクスポラトリウムと、ボストン・チルドレンズ・ミュージアムである<sup>4)</sup>。両者の展示手法は、1957年のスプートニクショック以降の米国科学技術教育改革と関連が深いと言われている<sup>5)</sup>。博物館活動が、政治的文脈の中に置かれていることを無視、あるいは隠蔽したままで、展示手法のみの模倣が奨励されていることが、まず問題とされなければならない。

「参加・体験」というとき、単に館側によって意図され準備された「展示」に限定することなく、博物館の運営にまで住民が参加することを本来の意味での参加と考えたのが伊藤寿朗であった。「第三世代の博物館」という概念を最も早く用いた竹内順一は、「保存」中心の「第一世代」、「公開」中心の「第二世代」に対して、「第三世代」を「入館者が館に『参加』することであり、受動的に館側から与えられるのを待っているのではなく、“何かすること”ではないだろうか<sup>6)</sup>」と考えた。この竹内の問題提起にもとづいて、伊藤寿朗は、まず1986年に「地域博物館論」の中で「第三世代の博物館像」の表をまとめ、博物館協議会の項目で「市民意志の反映の場として、市民代表の参加と権限の行使を保障」と書いた<sup>7)</sup>。その後、1991年に出版された『ひらけ、博物館』では、「審議内容の公開」の項目が付け加えられている<sup>8)</sup>。

「参加・体験」のレベルを単に「展示」という表層にとどめるのではなく、「収集・調査・研究」活動への参加、さらには「運営」への参加へと深めていく努力が、利用者＝市民の側に求められる。本稿では、大阪市立自然史博物館友の会の活動を取り上げる。45年間の活動の蓄積を通じて市民が参加し、積極的に自分の意見を学芸員に伝えていく過程の検討は、現在の表面的な「参加・体験型展示」に対する反省を迫るものであると考えるからである。

## I. 参加・体験型展示の起源

参加型 (participatory) の展示手法は、その設立が1903年にオスカー・フォン・ミュラーによって呼びかけられ、1925年に完成したドイツ博物館に端を発する。オスカー・フォン・ミュラーは、国民の科学技術教育の場という性格を重視して、見学者の興味を引く新しい参加型の展示手法を導入した。科学技術博物館の歴史を論じた高橋雄造は、この手法を「タッチ・アンド・トライ」と述べ、ドイツ博物館ほかの科学技術史博物館の参加型展示は、「見学者がボタンを押してモデルを動かしたり、スライドやテープレコーダーをスタートさせることにとどまることが多かった」とまとめている。これら科学技術史博物館に対して、高橋は、その後つくられた現代の科学技術博物館の多くは、科学技術史よりも科学技術の原理・現状・未来を展示するサイエンスセンターであり、これらサイエンスセンターの展示は、interactive (相互作用) と呼ばれているとする。「インタラクティブ」と呼ばれる展示は、自己学習のための機械であり、見学者の多様な反応に応じるために、「見学者が選んで押す」反応入力が複数用意されており、見学者の反応に応じて展示が変化する。高橋は、サイエンスセンターでは見学対象者として、市民よりも大衆を想定する、と論じている<sup>9)</sup>。

ティム・コールトンは、今日のハンズ・オン系博物館の起源は、19世紀後半のアメリカに生まれたこども博物館と20世紀初頭の欧米における、伝統ある主要自然科学館であると述べている。ティムは「ハンズ・オン」と「インタラクティブ」を「大体において互換性のある言葉」とし、次のような定義を掲げている。

博物館のハンズ・オン系展示装置あるいはインタラクティブな展示装置には明確な教育目標がある。その目標とは、個人もしくはグループで学習する人々が、事物の本質あるいは現象の本質を理解するために、個々の選択にもとづいて自ら探求してみようとする利用行動を助けることにある。

そしてティムは、「本当の意味でハンズ・オンの手法を採り入れた世界最初の施設」としてエクスペラトリウムをあげている<sup>10)</sup>。

エクスペラトリウムの成功は、アメリカ国内、さらに世界各地の科学館へ影響を与え、馬淵浩一によれば、日本でもほとんどの科学館における展示の源流となったという。日本で本格的な科学館の建設計画がなされた1960年頃の段階では、エクスペラトリウムはまだ開館しておらず、基礎教育の色彩の強いパリの発見の宮殿と、科学技術の振興を目的としたドイツ博物館が手本となった。つまり、日本の1960年代の博物館が設立された段階では、ヨーロッパの科学博物館が手本とされていたのである。未来志向的な印象を与えるものとして、また、空襲によって実物資料が豊富にないこともあり「科学博物館」でなく「科学館」という名称が用いられた。そしてその後、エクスペラトリウムなどの強い影響を受け、日本の科学館は次第に「サイエンスセ

ンター」的内容に傾斜していったという<sup>11)</sup>。

若月憲夫の分析によれば、日本の科学館設立の推移は、1960年代から70年代初頭にかけてと、1980年代以降に2つの山がある。高度成長期を背景に、科学技術の振興と、その基礎知識としての理科教育の充実が求められた60年代は、展示物としては、科学教材や実験装置を大型化したものや、館の職員が開発、制作した手作りのものを利用するなど、操作する、動くなどの要素はあるものの、「参加体験型」の展示としては未発達であった。オイルショックを経て1980年前後から、科学館の設立・増築は再び活発になり、この頃から科学館は、生徒・児童を対象とした理科教育のための施設から、幅広い層の人々が科学を遊びながら学ぶ、という知的アミューズメント施設へと変化し、規模が大型化するとともに、集客性が施設づくりの一つの指標とされるようになった。1969年に北米に誕生したオンタリオサイエンスセンターとエキスポラトリウムExpo-Labの展示手法は、世界的に注目を集め、この成功例を参考にしつつ、1970年の大阪万博を契機に発展した日本の展示技術の中で、1980年代の科学館の「参加体験型展示」が開発されたという<sup>12)</sup>。

世界各地の科学館で、エキスポラトリウムの展示がお手本とされるのは、他の施設の展示製作者が同レベルの展示を制作出来るように、細かく図解したレシピ集がエキスポラトリウムから出版されている<sup>13)</sup>点が多いと考えられるが、そうしたマニュアルに従って展示改革をするのは、安易で没个性的なことだと言わざるを得ない。

欧米で生まれた理論や博物館像の後追いをすることの愚かしさは、すでに1972年に、大阪市立自然史博物館の日浦勇が、以下のように指摘している<sup>14)</sup>。

欧米の博物館を視察し見学して帰ったえらい人たちが、異口同音にあちらの博物館の素晴らしさを宣伝する。後進国の後進博物館にいる私たちは、絵はがきやパンフレットを見せられるたびに、溜息をつきながら何とかして先進博物館に一步でも二歩でも近づかねば、と決意する。また、たまの出張に上野へ足を運べば、国立科学博物館の威容と素晴らしい標本群に圧倒され、これまた発奮する。……

ここで突破口を切り開くためには、発想を全然変えてしまうことである。大英博物館の縮刷版を目指すのではなく、まったく別のアイデアをもつのである。

そして日浦は、地方主義に徹底することによって、秀れて独創的な研究が出来ることを述べ、次のような提案をする。

世界中にただ一人しかいない特殊な学芸員になり、ただ一つしかない特殊な館をつくりあげることを目指す——そのような学芸員や博物館の数がふえ、それがお互いにネットを組むことによってお互いの弱点をカバーし合う。私たちの希望はそこにしかない。

また1976年には、東京都高尾自然科学館の芹沢俊介が、「自然史教育の目的は、究極的には個人の主体性の確立にある」と指摘している。「主体性の確立のために最も有効なのは、他人のまねごとでないその人独自のもの、すなわち originality の追求であろう」と述べているのであ

る<sup>15)</sup>。

こうした日浦や芹沢の主張とは反対に、日本の多くの科学館はエクスプロラトリウムをお手本としてきたと言われるのだが、そのエクスプロラトリウム開設の経緯をここで確認しておこう<sup>16)</sup>。

1969年に開設されたエクスプロラトリウムは、フランク・オッペンハイマー夫妻によって創設された。兄のロバート・オッペンハイマー<sup>17)</sup>とフランク・オッペンハイマーは、1942年以降、アメリカの原子爆弾製造プロジェクトに参加していた。戦後、フランク・オッペンハイマーはミネソタ大学でテニュアを獲得していたが、1937年から1940年の間、共産党に加入していたことが原因で、下院非米活動委員会の召喚を受け、他者の活動に関して黙秘したため、1949年、ミネソタ大学から追放された。一家は、南コロラドに移住し、農場で働いたのち、フランク・オッペンハイマーはハイスクールの教壇に立っていた。のちのエクスプロラトリウムでの科学への経験主義的アプローチの基礎は、このハイスクール時代の教授法にある。

スプートニックショックにより、アメリカ人は競争心を喚起され、冷戦下では技術的優位が唯一の防衛策であることが、公式に宣言された。科学を学ぶことが、愛国的行為となったのである。このような状況下で多大な影響を及ぼした科学教授法プログラム(Physical Science Study Curriculum, 略称 PSSC)は、フランク・オッペンハイマーの友人で、マサチューセッツ工科大学のジェラルド・ザカリアスによって設計された。フランク・オッペンハイマーはPSSCを初めとする各種教育プログラムの開発にかかわり、その過程で、のちにエクスプロラトリウムの一部となった物理学模型や展示を編み出したのである。

エクスプロラトリウムが、超大国間での覇権争いを支える科学技術教育改革の一環としてアメリカの中で受け入れられ発展してきたこと、そしてその科学技術が何のために用いられるのかを、ハンズ・オンで楽しく学ぶ来館者は考えてみる必要があるのである。

## II. 日本博物館史に見る学びの中の陥穽と来館者の解釈

日本の博物館史を振り返って見るならば、すでに1912(大正元)年に棚橋源太郎が東京高等師範学校附属東京教育博物館内の通俗教育館において、観覧者自らが操作できる展示や生態展示を導入している<sup>18)</sup>。日本初の「触れる展示」は、社会教育行政の確立期=生活レベルでの民衆教化の時代、にその産声を上げたのである。この社会教育行政の確立期は、第二次桂内閣期に当時の小松原文相が、幸徳事件の発生に対する危機意識から、国民が「危険思想」へ傾くことを阻止するために1911(明治44)年に設置した通俗教育調査委員会を出発点にしている<sup>19)</sup>。

通俗教育館の開館に先立ち、取材に訪れた記者に対して、棚橋は、「展覧の主意は博物や理科の実物教育と共に、自らボタンを推したりハンドルを廻して理科応用の実際的知識を普及せしめやうとするのにある」と語り、英国のサウスケンジントン博物館及びドイツ・ベルリンの科学劇場に学んだ、と述べている。そして、「日本人は元来器械を恐れるが、それではとても工業国た

ることは出来ない。斯う云ふ所が出来た以上は普通の展覧が『手を触るべからず』と云ふのとは反対に盛んに手を触れて、器械に近づき親しむ思想を普及したいと思ふ」と語っている<sup>20)</sup>。

見学した記者の方は、「館内は天産物、加工品、物理原理、其の応用、衛生、天文地理等の部に分つてあるが、天産物部ではまづ玻璃器に水を入れ種々の魚や小動物を飼養し、前の紙片に一々魚名を記し猶委しい事を裏の図書館でこれこれ云ふ本を見ろと書いてある。これは、宛然小水族館の様だ。鳥獣の方は小山画伯が描いた背景の外に樹木や土やすべて永久的のものにつくり、そこへ適宜に鳥獣剥製を置く、説明は魚類の通り又加工品としては膳碗の作り方などを実物と絵とで示し、物理の原理は蓄電池で電気を起したり、其の応用としては電車の模型を走らせたり、電燈をつけたり、水上ポンプや米搗器械を動かしたりする。それが皆ボタンを押したりハンドルを廻したりすると実際に動くのだから面白い」と感想を記し、水族館的な展示や、ジオラマ式生態展示、観覧者自らが操作し実験することの出来る展示に興味をそそられている様子が読み取れる<sup>21)</sup>。

棚橋は翌1913（大正2）年にも、『帝国教育』誌上で通俗教育館について、「理化学実験の器械及び普通なる器械の見本模型を陳列して、公衆をして随意に之を試用せしむることは、実に当館陳列場に於ける事業の主なるものとす」と説明している<sup>22)</sup>。このような通俗教育館の斬新な展示は来館者を激増させた。1912（大正元）年11月30日の開館以来、1913（大正2）年2月14日までの開館日数55日間で、来館者総数は20,632人であって、一日平均が375人であった。通俗教育館開館前の教育博物館の来館者一日平均が71人であったから、棚橋も「5倍強に相当せり」と記述している<sup>23)</sup>。

この東京高等師範学校附属東京教育博物館は、1914（大正3）年には、東京高等師範学校の附属から離れ、文部省普通学務局所管の東京教育博物館となり、学校教育よりも通俗教育のための施設であるという構想のもとに運営されるようになった。1915（大正4）年春には、全国的なコレラ病の流行があり、これを予防するための知識を普及する特別展覧会が開催され好評であった。そのため、以後毎年数回、日常生活に結びついた特別展覧会が開催されることになった<sup>24)</sup>。そして1919（大正8）年の生活改善展覧会の総入場者数が107,670人、1920（大正9）年の「時」展覧会の総入場者数は222,845人といった盛況ぶりであった<sup>25)</sup>。

田中聡は、『衛生展覧会の欲望』の中で、棚橋源太郎が関わったこれら生活改善のための特別展が、多数の人々を動員した状況から次のような分析をする。それは「『改善』したり、『改良』したりすべき対象として、自身や他人の生活の細部を点検する視線がこの時代には成立している」という分析である。そして、こうした自他の生活を点検する眼差しは、生活改善にかかわる展覧会であれば、イメージとしての家庭や個室の輪郭線を越えてやってくる者たちを警戒させ、また衛生博覧会であれば、その壁を侵す者たちの危険を説くことで、侵されるものの輪郭、破かれる輪郭、を描くことになる。生活改善展覧会で提示された「家庭」が、「国民」の社会単位として意識されるようになり、例えば伝染病であれば、海の向こうの国からやってきて、この国を

侵すものと認識させられるということ、田中は指摘しているのである<sup>26)</sup>。

犬塚康博の研究からは、1939年に活動を開始した満州国国立中央博物館において、館外活動を含む教育普及活動が企画実施されていたことが明らかにされている。満鉄教育研究所附属教育参考館を引き継いだ新京本館は、日中戦争の進行に伴い、新設の施設を持つことが出来ず、「庁舎なき博物館」を標榜して「博物館エクステンション」を展開したのである。

「博物館エクステンション」として掲げられた活動には、「移動講演会」「現地入所科学研究生」「博物館の夕」「満州科学同好会」「科学ハイキング」「展覧会」「文献発行」がある。通俗の事業として位置づけられた「博物館の夕」は、講演と映画上映を組み合わせたものであり、第4回には新京交響楽団によるコンサートを開催しており、日本人が手がけたミュージアム・コンサートの先駆例の一つであった。また「満州科学同好会」は犬塚によれば、専門的な学術団体と言うよりは、むしろ戦後一般化する博物館友の会に類するものであった。こうした「博物館エクステンション」の動きは、当時の日本の博物館観＝「単なるモノの展示場」、の否定をめざしたものであった<sup>27)</sup>。

大東亜博物館構想を研究した金子淳は、近代博物館を権力の象徴と捉え、「特定のイデオロギーに媒介された価値を普及する手段として、その社会におけるさまざまな媒体（メディア）の中から、『目に訴えること』をその最大の特徴とする博物館という〈装置〉が選択されてきた」と述べている<sup>28)</sup>が、この金子の指摘を敷衍するならば、「五感で感じる」ことによって、来館者はさらに権力の網の目の中に組み込まれてゆくと言えないだろうか。

もっとも金子は、博物館において一方的な〈見せる〉行為だけが存在していたのではなく、その意味合いを主体的に読み解いていく「観客」が介在していたことにも注意を払っている。この来館者の側のしたたかな博物館利用のありさまを論じたのは橋本裕之である。橋本は、来館者は一方的に展示のメッセージを供給される受動的な存在ではなく、むしろ展示されたものを解釈するという意味で展示におけるパフォーマンスの主体であると述べ、「現実にある来館者の体験を論証する試み」の必要性を論じている<sup>29)</sup>。

博物館活動を通じて伝達されるイデオロギーと、価値の内面化の検討が必要とされる一方で、展示者の意図とは無関係に博物館を訪れ利用する来館者の多様な姿にも、目を向けねばならない。国立歴史民俗博物館の篠原徹は、博物館をフィールドワークして、「人は自らの体験領域に対象を引き込んで対象を常民的に歪曲して理解する」「人は真質について極めて関心がある」「人はおよそ民俗学者の解説には無関心である」という三つの作業仮説を提唱した。そして篠原は、博物館は不思議な空間としてなんの説明もない謎をかける場である方が気が利いているのではないだろうか、と結んでいる<sup>30)</sup>。

ハンズ・オン系の館で言えば、海老原裕太が描くように、「ボタンを押し、あるいは回転させ、投げ、ひっぱり、結果を見るでもなく展示室から走り去っていく子ども」が多数存在するのである<sup>31)</sup>。こうした子どもたちの姿は、大人の用意した教育のお膳立てに対する子どもからの異議申



し立て、と読み取るべきであろう。

### Ⅲ. ハンズ・オン批判と日本での参加・体験型展示の現況

海老原は、アメリカ発のハンズ・オンの考え方を輸入したところから「参加体験」型博物館の流行が始まったとし、「参加体験」型展示が参加のための参加、体験のための体験以上のものを提供できていないために、「参加体験」は単なるスローガンに過ぎないのではないかという反省が起き始めている、と述べている。そして、博物館内の「物」と博物館利用者との「リレーションシップ」は、例えば分類展示してある生物標本に魅入られ動こうとしない子どもの姿の中に成立するようなものだとし、そこに「濃厚な意味を持った場」を見出そうとするのである<sup>32)</sup>。

同様の指摘は、大阪府立近つ飛鳥博物館館長の大庭脩にも見られる。大庭は自身が若い頃、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館を訪ねて輸出磁器の存在を知り、以後20年近く勉強を続けた経験を綴りながら、次のように論じている。「私は既に一人前の大人で、学生ではなく社会人であった。一人の社会人が博物館の列品に刺激されてその問題に喰いついて知識を得ることは『生涯学習』ではないのか」「明るく、わかり易く、列品をきれいに配列して、より多くの人に来て貰うことが、果たして生涯学習の充実につながるのでしょうか」「知識を得る為には努力が必要なのだ。据膳を食って蝶よ花よとおだてられることが良いとは限らない<sup>33)</sup>。」お膳立てされすぎた環境、そして他者によってあらかじめ準備された「参加・体験」が与えられることに、疑いを持つことが必要なのである。

実際の博物館での「参加体験型展示」の導入状況については、丹青研究所が1999年に行った第4回全国博物館園調査が次のようなデータを集めている<sup>34)</sup>。この調査は、無作為抽出した全国の博物館園4,198館園に対して行われ、1,432館園から回答を得たものである<sup>35)</sup>。この調査で「触ることのできる展示（実物資料/レプリカ・その他）<sup>36)</sup>」は、回答を寄せた1,432館園の内41.0%の館園が、また「それ以外の参加・体験型展示（視覚、聴覚、嗅覚に訴える展示等）」まで含めると、48.5%に及ぶ館園が「導入している」と回答している。

ところで、日本国内における参加・体験型展示の導入状況に対しては、丹青研究所の石川貴俊・庄司麻美が、次のような分類を行っている<sup>37)</sup>。

- A. 演出型<sup>38)</sup> (1) 情景再現展示 (2) ジオラマ展示
- B. 映像型 (1) シュミレータ展示<sup>39)</sup> (2) バーチャル・リアリティ展示<sup>40)</sup> (3) その他 (さまざまな技術を統合)<sup>41)</sup>
- C. 活動型 (1) ハンズ・オン展示 (2) 実演・演示 (3) 野外における展開 (建物や遊具を設置)

このように分類した上で、石川らは、「行き過ぎたアミューズメント化に対する批判と反省から、従来の実物展示を見直す動きも出ている」と記した上で、参加・体験型展示に関連する今後有望

な動向を以下のように展望している<sup>42)</sup>。

- ① 自分化できる博物館づくり……昭和30年代を展示テーマに据えたものなど自分自身と関連づけやすいもの
- ② 市民が企画・制作する「参加・体験型展示」……市民コレクションの展示や、展示制作への市民の参加
- ③ バリアフリー化……視覚障害者向け展示、「移動博物館」事業
- ④ デジタル・ミュージアム……東京大学総合研究博物館の事例
- ⑤ 遺跡そのものの保存・展示……遺跡を学習のフィールドとして整備

こうした5つの動向・方向性は、確かに博物館利用の幅を広げているものと言えよう。ただ、「参加・体験」が「展示に対する利用」という枠を超えて、さらに市民の「参画」という側面を持ちうるのは、石川らの分類による②の動向であろう。ただし、この場合、客観的な鑑賞に耐えうる展示であるのかどうか、あるいは展示制作が調査・研究に裏付けられたものであるのかは、きちんと問われねばならない。

市民による企画ではないが、参加体験型学習を積極的に推進してきた大阪府立近つ飛鳥博物館の一瀬和夫は次のような出来事を記録している。これは、一瀬らが小学生に修羅引きの体験をさせていた時、端で見ていた一人の保護者から「あなたは考古学者であるのだから、横穴式石室と修羅との関係をもっと子どもたちに詳しく説明する必要があるのではないか」という言葉をかけられ、しばらく無言で立っていた、という記述である。一瀬が「小学校1年生から6年生のバラけたメンバーの中で『修羅について』の講釈をこれ以上する必要があるのだろうか。体験的に各自がただ一つのことをめざすわけでもなく、めいめいに、様々なことを肌で感じ、自分で発見したことを糸口にして考えているようだった。その時、シンプルに一つのこと限定して話することに意味があるのだろうか」と自らの心中で反論しながらも、この保護者の言葉にひっかり、この出来事を書き留めた<sup>43)</sup>という点に、注意が払われねばならないであろう。

文部省の報告書『平成11年度 親しむ博物館づくり事業実施報告書』の中の事業実施報告でも、行田市郷土博物館では注意すべき点として、「学習目的を明確にし、時代考証等についても留意しないと、単なる時代劇遊びになってしまう危険性があります」と報告している<sup>44)</sup>。また大阪府立近つ飛鳥博物館からの報告にも、博物館でのワークショップで身をもって物を作る行為が、ともすると、作成する行為自体に夢中になってしまい、本来の意図が希薄になってしまった場面が見られた、との問題提起がなされている<sup>45)</sup>。参加体験を一過性のイベントとして終わらせるのではなく、こうしたイベントの前後に、知識の体系への橋渡しをきちんと行う必要があると考えられるのである。

#### IV. 市民から博物館への発言

来館者の体験を論証する試みは、日本ではまだ研究の蓄積に乏しい。しかし、博物館利用者が一方的に展示のメッセージを供給される受動的な存在でなく、博物館を自分流に利用できる市民である事例を拾い上げることは可能である。ここでは、大阪市立自然史博物館友の会の活動を取り上げたい。

大阪市立自然史博物館と同友の会の沿革を先に簡単に触れておきたい。大阪市立天王寺動物園を経て、大阪市教育委員会に移った筒井嘉隆は、社会教育における自然科学知識の普及の重要性を指摘し、大阪市に自然科学博物館の設置を提唱した。その結果、1950年度予算には自然科学博物館開設経費が計上された。開設準備は筒井と彼に協力する十数名の嘱託（おもに大阪在住の小・中・高校教員や同好者）・研究者によって行われた。ところが同年9月のジェーン台風による被害復旧のため、建物の建設が見送られた。そのため大阪市立自然史博物館の前身である大阪市立自然科学博物館は、1950年11月、天王寺の市立美術館に仮住まいし、2階ギャラリーの一部に数台の展示ケースを置いて展示を始め、以後7年間この間借り状態が続いた。専任職員は筒井と中学校校長より嘱託に転じた堀勝、それに1名の事務職員だけであった。固有の建物を持たないため、博物館はその活動の場を自然の中に求め、活動は上記協力者の奉仕によって支えられた。この間の事情を、2代目館長千地万造は次のように述べている。

7年間もの長期間この不遇な博物館を支えることが出来たのは専任職員の大変な努力もさることながら、一流の研究者であり、しかも啓蒙活動に熱心な人たち、まじめな教師であり、しかもたゆまず研究を続ける人たち、自然を愛してやまぬ同好者、このような幅広い協力者たちの献身的な助力に負うところが非常に大きかった。これらの人たちの多くはいまなお博物館の資料収集や教育活動に積極的に協力を続けてくれている<sup>46)</sup>。

1955年5月、「よちよち歩きの博物館」を支えた協力者たちが中心になって、現在の友の会のルーツである「大阪市立自然科学博物館後援会」が発足し、会の発足と同時に、現在まで続く月刊普及誌“Nature Study”を刊行し、会員への配布が始まった<sup>47)</sup>。「大阪市立自然科学博物館後援会規約」から抜粋すると、

目的 本会は大阪市立自然科学博物館（以下博物館と言う）の運営に協力し、その活動を援ける。

事業 本会は次の事業を行う。

1. 博物館の運営、企画について建言し、その相談に応じる。
2. 博物館の事業を援助する。
3. 博物館の施設の充実をはかること。
4. その他本会の目的達成に必要な事業を行う<sup>48)</sup>。

となっており、後援会の側が館に対して「援助する」という立場が明らかにされている。

博物館後援会第2回総会の報告を見ると、以下のような事業報告がなされている。

- a. 博物館の行事（講演会・採集会等）を通知した。
- b. 博物館に協力して Nature Study を編集し、毎月発行して全会員に配布したほか、映画研究シリーズの3と4、自然研究シリーズ3を出版・配布した。
- c. 指導者・講師の派遣をあっせんした。
- d. 博物標本・図書などの貸出をあっせんした。
- e. 博物館の建設促進についての陳情書を作成し、12月6日と同8日の両度にわたって、井上・上田・三木の3名誉会員と赤塚委員が代表となり、教育委員長と市長に陳情した。（1月号掲載の通り）<sup>49)</sup>

また、“Nature Study”に関しては、当時の筒井館長が、次のように述べている。

博物館は民衆と遊離してはいけない。常に市民と接触し、密接なつながりをもって共に歩まねばならぬと思っている。博物館の行事は多くの人の希望によって計画され、そしてその企画は周知されなければならない。……直接連絡し得る博物館ニュースの発行が急務であることはよくわかっていたが、何分にも経費が乏しく、研究報告の出版すら意にまかせぬ状態なので、残念ながら見送っていたところ、今回みなさまの御好意で博物館後援会が生まれ、このnewsの出版費用を出して下さることになったのはよろこびに堪えない<sup>50)</sup>。

1956年度の博物館後援会の会計報告を見ると、収入総計260,553円（うち会費収入221,200円）のうち、印刷費に195,050円が使われているのである。1956年4月の段階で282名だった会員は、1957年2月末日の段階で418名に増えていた<sup>51)</sup>。

博物館後援会によって、博物館建設促進についての陳情書が提出された、その翌1957年、大阪市立大学キャンパスがアメリカ駐留軍から大阪市に返還されたのに伴い、大阪市立大学文学部が使用していた旧靱（うづぼ）小学校校舎の西半分を、自然科学博物館とすることになった。市立美術館から資料を移転して、1958年1月に開館し、5名の学芸員が専任され、事務職員も増員された<sup>52)</sup>。この靱移転に伴い、1958年3月29日から、博物館後援会は「大阪自然科学研究会」として再出発することとなった。規約によれば、大阪自然科学研究会の目的は、

第2条 本会は博物館の事業に協力して、楽しく自然を研究し、自然科学の普及発展に寄与するとともに、会員相互の親睦をはかることを目的とする<sup>53)</sup>。

とされ、後援会時代の規約に盛り込まれていた「運営に協力し」が「事業に協力し」と変わり、「その活動を援ける」という語句は姿を消している。これは、靱への移転後、博物館の事業が急速に増加し利用者も増えた結果、会員数が増加し、構成においても小・中学生から一般市民、専門家に至るまで多くの層が含まれるようになったためである。会は博物館を中心とした同好会的な性格を強く帯びようになり、自然探求的な指向が濃厚であった<sup>54)</sup>。

千地万造はこの靱時代のことを「この時期は学芸員のひとりひとりが普及活動を通じて市民の

瀧端：参加・体験型博物館における学習者の主体性に関する一考察

大阪市立自然史博物館および友の会の沿革

西暦	和暦	大阪市立自然史博物館略史	大阪市立自然史博物館友の会略史
1949	昭和 24	11月8日, 自然科学博物館開設準備委員会設置	
1950	25	4月1日, 自然科学博物館費予算に計上, 11月10日, 市立美術館2階廊下一部に数台のケースを置いて展示を始める	
1952	27	4月17日, 博物館相当施設に指定, 6月2日, 大阪市立自然科学博物館条例及び規則制定, 7月10日博物館法第10条により登録(第2号)	
1955	30		5月2日, 「大阪市立自然科学博物館後援会」発足, “Nature Study” 刊行
1956	31		後援会が12月6日, 大阪市教育委員長宛, 12月18日, 大阪市長宛, 博物館建設促進についての陳情書提出
1957	32	6月7日, 大阪市立大学文学部が使用していた旧靱小学校校舎に移転	
1958	33	1月13日, 開館	1月1日, 「大阪市立自然科学博物館後援会」を「大阪自然科学研究会」に名称変更
1959	34	新館建設について, 大阪市社会教育委員会議が意見具申	
1967	42	大阪市総合計画局 “30年後の大阪の将来計画” により, 長居公園内に新館敷地確定	
1969	44	8月新館建設のための基本構想審議委員会組織	
1970	45	自然史博物館建設委員会組織	
1973	48	4月1日, 旧館閉鎖	
1974	49	4月1日, 大阪市立自然史博物館条例公布, 4月26日, 大阪市立自然史博物館開館式挙行, 日本博物館協会『博物館研究』Vol. 10, Nos. 2-3が大阪市立自然史博物館特集号に当てられる	11月1日「大阪自然科学研究会」を「大阪市立自然史博物館友の会」に名称変更
1993	平成 5	『大阪市立自然史博物館館報』18(平成4年度)に, 山西良平「大阪市立自然史博物館普及教育活動の系譜」掲載される	

本表の作成に当たっては, 以下の資料を参考にした。

『大阪市立自然史博物館館報』特別号, 1975年。

『大阪市立自然史博物館館報』18(平成4年度), 1993年。

『大阪市立自然史博物館館報』23(平成9年度), 1998年。

筒井嘉隆「Nature Studyと博物館」大阪市立自然科学博物館『Nature Study』第2巻, 第10号, 1956年, 2-3頁。

「博物館についての陳情」『Nature Study』第3巻, 第1号, 1957年, 3頁。

<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/tomono-kai/kiyaku.html>

多くと親しくなり, しっかりと手をつないだ時期でもあった」と記している。そして, 「市民・学生をわれわれの調査活動に巻き込み, その実践を通じて真理を追求する精神にふれ, あるいは発見のよろこびを感じさせるといった普及活動を積極的に行う」という活動を強化していった<sup>56)</sup>。こうした靱時代の活動方針は, 初代館長筒井が, 早くも1956年に「Nature Studyと博物館」の中で, 博物館構想として明らかにした以下のような活動方針を継承・発展させたものであった。筒井は, 「研究については, 勤務先や自宅に研究室をもたない一般研究者(小中学校の教官を含む)に開放研究室を提供すること, また, 大阪にある自然関係の各学会・同好会・研究会等に共

同事務室を提供し、その活動や行事がわかり互いに連絡のとれる、文字通り科学普及センターたらしめたい、日曜画家があるように、大ぜいの日曜科学者 (naturalist) があるのだから、その人たちのセンターたらしめたい」と提唱したのであった<sup>56)</sup>。

大阪市立自然科学博物館時代には、1964年のマチカネワニ発掘調査を初めとする市民・学生を巻き込んだ調査活動、「関西トンボ談話会」による近畿地方のトンボに関する基礎的学術的データと標本の蓄積、といった市民との協力による地道で継続的な調査・研究活動が築かれていった<sup>57)</sup>。

靱の博物館は仮住まいという認識の下に、靱への移転の翌1959年には、大阪市社会教育委員会会議が、大阪市長・大阪市教育委員長宛に新館建設についての意見具申書を提出、そして1974年には長居公園で、「大阪市立自然史博物館」と名称を変更して開館した<sup>58)</sup>。これに伴い、大阪自然科学研究会は、「大阪市立自然史博物館友の会」と名称を変更し、「大阪市立自然史博物館友の会規約」の中では、会の目的は次のように定められた。

第2条 本会は、博物館を積極的に利用して自然と親しみ、学習しようとする人々により構成され、会員相互の親睦を深め、博物館と連携しつつ、自然史科学の発展に寄与することを目的とする。

大阪自然科学研究会時代は、自然探求的な指向が強かったが、長居への移転を契機に、博物館をとりまく市民の輪を大きくしていくことがめざされ、「友の会」と改称されたのであった<sup>59)</sup>。

1980年には、日浦勇が、『博物館研究』誌上で、自立したナチュラルリストを育てる方法としてのサークルづくりを提唱している。「自然観察会をバネにしてサークルづくりを呼びかけ、誕生の手助けをし、方向づけをし、時には指導もし、一人一人が自然研究者として自立する、しかも孤独な研究者としてでなく、仲間が協力しあって集団として力を発揮する」「研究者としての発育段階に応じ参考文献や、顕微鏡などの研究機器も高度なものが必要となり会合の場所、情報交換のサークル誌の印刷機器、最後は研究成果の取りまとめ方の指導や発表媒体への仲介も必要となってくる。それらの補助は博物館と学芸員の役目である」という主張である。こうしてサークルづくりが進められ、前述の「関西トンボ談話会」のほか、「近畿オサムシ研究グループ」「直翅類研究グループ」「大阪の昆虫をしらべる会」などのサークルが、館の昆虫研究室を拠点にして生まれた。「どのサークルも夫々研究室とは独立した事務局と運営体制をもち、学芸員が世話はしていない。学芸員はサークルの1メンバーであって、共同研究者であり、たまたま専門知識が比較的深い分野でのみ指導性を発揮するだけのことである」と日浦は記し、「博物館が『市民』と共にあることによってのみ、資料収集も、研究活動も、教育活動もはじめて発展が保証されるのである」と結んでいる<sup>60)</sup>。

大阪市立自然史博物館友の会の評議員であるMさんと、F学芸員のやり取りを、ここで検討してみたい。大阪市立自然史博物館友の会では、月一回の月例ハイキング(自然観察会)を行う他に、年一回の友の会合宿と、同じく年一回の昆虫採集入門講座合宿などの行事を行っている。

以下素材とするのは、1999年7月に沖縄県西表島で実施された、「西表合宿」に関する電子メールでのやり取りである。Mさんは、5月に合宿担当の評議員・学芸員諸氏に次のような内容のメールを送信する。

西表の下見を終えて、二ヵ月後に控える夏合宿の重圧にひしひしと戸惑いを感じていること、新米評議員で、しかも何の専門家でもない自分が合宿に随行する意義などあるのかという初歩的な質問から問直さなければならぬ状態であること、そして旅費の高くつく西表合宿を決定したからには、西表島の「いま」、「ここで」行く合宿の意義を考え直す必要がある、とMさんはまず問題提起をする。そして、次のように要望する。

私は西表の「いま」、「ここで」を共に感じ取るために、学芸員の方々に望みたい事があります。専門の分野のことを説明する皆さんがどのように西表の「いま」、「ここで」を楽しんでいるかを伝えて欲しいのです。沢山の知識と情報は時には洪水のように通り過ぎるだけに終わってしまいがちです。たった一つの思い出から、そのむこうに広がる自然の持つ懐の深さを垣間見る事があります。

このあとMさんは、今回の下見で、自分の愛読書に書かれていた「つめた貝」の実物を見、メンバーの一人から「つめた貝の砂茶わん」のことを教えてもらったことを述べる。見て、知る、喜びはたった一つの出会いだけでも充分、と書いたあと、次のように結んでいる。

おそらくこういう一瞬をどうぞ参加者に伝えられるような工夫を学芸員の方達にはしていただきたいと思います。

この要望に対してF学芸員は、「大阪の自然を充分わかっていないと、(大阪と異なる)西表の固有性を発見するのは難しい」と述べながらも、次のように返信する。

ツメタガイの「砂茶碗」は大阪でもみれないことはありません。……しかし、Mさんの以下の文章にあるように、ツメタガイとの出会いが劇的で印象に残ったのは、「西表島の固有性」とは無関係です。……本州でも同じものが見れるから、(コストが高い)西表に行く必要がない(あるいは西表で観察する必要がない)と考えるのは早計だと思います。……合宿下見を終えた今の私は、知識の洪水(種名を教えること)は必須のことではないと考えるに至っています。……私が12年前(当時3回生)の西表で感じたことは、「わからない、見ず知らずの生き物に満ちた異世界」というものです。この強烈な体験が植物分類学を大学院で専攻することになった大きなきっかけでもありました。……私が参加者のみなさんに伝えたいことは、「わからない、見ず知らずの生き物に満ちた異世界(西表の自然を前にして途方に暮れる)」のたった一点です。……

Mさんは、自分のメールがF学芸員の12年前の思い出を引き出せたことを喜び、「何故植物分類学者となり、昆虫学者となり、地学屋となり、海洋生物学者となり、動物学者になったか」を伝えて欲しい、「捜し物をしている私達にはまだ捜せない何かを、少なくとも選び取った皆さんからのアドバイス、メッセージを期待したい」と返信している。友の会の行事を自分たちで作

り上げる、というMさんの積極的な姿勢をF学芸員を始めとする、合宿担当の評議員・学芸員が情報を共有しつつ、受け止めているのである。

大阪市立自然史博物館友の会で、評議員以外の一般会員も博物館活動を自分流に楽しんでいる様子は、友の会総会での「会員のスライド・ビデオ大会」で、会員の発表が盛んで、万が一、時間が余った時のために評議員が用意しておいたスライド等の出番がないこと<sup>61)</sup>からも窺えよう。こうした友の会の活動は、一過性の「参加・体験型展示」による経験とは質の異なる博物館の利用の仕方である。

大阪市立自然史博物館友の会は、国内の博物館友の会活動の中で、唯一の成功例と言われている<sup>62)</sup>。1999年度の段階で、会員数は2,058世帯(人)、賛助会員15件となり、年間14回(計画17回、中止3回)の行事を実施し、行事には延べ761名の会員とその家族が参加した<sup>63)</sup>。

友の会会員の中から、数多くの研究サークルを生み出し、市民の参加によって学術的な標本や研究成果を生み出すという活動、これらを通じて「市民の中から多数の研究者を輩出することが最終的な到達点であり、これによって、博物館の教育活動は完結することになる<sup>64)</sup>」という館の姿勢は、表面的な「参加・体験型展示」に対する反省を迫るものである。また、現在のハンズ・オン展示やワークショップが、主として幼児・児童を対象とするものにとどまりがちなのに対して、大人の市民と学芸員の対等な関係が築かれていることも重要である。ここには、その前身である「大阪市立自然科学博物館」の後援会としてスタートし、館がまだ市立美術館で間借りしていた時代から、市民が「よちよち歩きの博物館」を支える協力者であったという歴史がある。市民の側は、与えられた「参加・体験」で満足するにとどまらず、自らが、博物館活動を支える存在、あるいは博物館を作り出す存在に成長する必要があるのである。

《付記》本稿の骨子は、2000年9月、日本社会教育学会第47回研究大会(於岩手大学)において発表した。「大阪市立自然史博物館友の会」の活動の様子は、友の会副会長を務めておられる西川喜朗先生(本学人間学部教授)からお話を伺うとともに、資料を提供していただき、本稿作成にあたって貴重なアドバイスをいただいた。また、友の会評議員六車恭子さんと藤井伸二学芸員のご了解を得て、電子メール上のやり取りを引用させていただいた。本来私的な性格を持つ電子メールでのやり取りの公表をご快諾くださったお二人と、西川先生にお礼を申し上げます。



資料

1999. 5. 1

友の会評議員の、Uさん、Sさん、Mさん、Tさんへ

すでにお持ちかも知れませんが、西表島の資料をお送りいたします。

館のひとはみんな玄人のようで、評議員の私たちだけは西表島の素人のようですので、手元にあった資料をコピーしました。

p. 155, 158, 159 は、「沖縄、離島情報」(平成 10 年春号) 林檎プロモーション発行で、月曜日に館で見たものの、古い版です。

では、西表で会いましょう、

とり急ぎ、

友の会評議員 N

祝健康!

Sさま 西表夏合宿関係者の皆様

5月の8～10日にかけての西表の下見を終えて、二ヶ月後に控える夏合宿の重圧にひしひしと戸惑いを感じている者の一人です。新米評議員で、しかも何の専門家でもない私がこの合宿に随行する意義などあるのか、という初歩的な質問から問い直さねばならないところです。Uさんも書かれているように<sup>65)</sup>高価な買い物をする(?) 参加者に満足のいくツアーであるためにはどんな工夫をしなければならぬか、いろいろ提案が出されているようです。私は仕掛人の立場での発言はできそうもありません。これから書く事は一般参加者の立場からの発言と思って、お読みいただければと思います。

過去4回の合宿(美里町、蒜山、しらびそ、マキノ)を経験してみて博物館の合宿は観光ツアーではないことを、おおよそ今回の応募者も知っていると思います。初めて参加する人もある程度は博物館とのつき合方をそれなりに解決済みではないかと思えます。そういう意味では従来の合宿のスタンスを守ればいいでしょう。ただ今回はあまりに旅費が高く、磯での貝やカニや魚、植物だけの観察ではどうかというUさんの意見も最もです。もっと安く行なえる和歌山あたりの海岸での合宿でもよかった筈です。しかし、私達は西表合宿を決定し、これを希望する参加者がもうすでに定員を超えている現状を考えると、改めて西表島の「いま」、「ここで」行う合宿の意義を考え直す必要があるようです。

下見に行く段階では、私には何の予備知識もありませんでした。4月26日の打ち合わせ後「西表の自然」の本を注文はしたもののまだ私の手元には届いてなく、直前にN先生から封書が届き、「博物館の学芸員は西表のプロだけれど僕達評議員は西表の素人なので」と

西表島の生物に関する資料を送っていただきました。私の手引書はこの資料とせいぜい虫の図鑑を眺めて西表島で採集される昆虫相が亜種もしくは固有種であるらしいという漠然とした認識だけでした。しかも西表島の1/3が保護地区であることを考えると、従来の合宿のようにはいかない、だからこそ西表の「いま」、「ここで」がクローズアップされてきたのです。

3日間の体験を通して、学芸員の方達の様々の説明にもかかわらず私の知識量はそれほど進んだわけではありません。Fさんが指摘するように本人の中身次第というところでしょうか。私が歩いた西表島の真昼の陽光も夜の闇もこの大阪近辺の自然とは趣が異なるものでした。そう言う意味ではどの参加者も亜熱帯の森が形づくると異なる環境を肌で感じ取れると思います。学芸員の方達がこれは伝えたいという情報の量を参加者がどの程度受け取れるかは各々の好奇心の器次第というところでしょうか。それもたぶん参加者の責任にすればよいのです。

しかし私は西表の「いま」、「ここで」を共に感じ取るために、学芸員の方々に望みたい事があります。専門の分野のことを説明する皆さんがどのように西表の「いま」「ここで」を楽しんでいるかを伝えて欲しいのです。沢山の知識と情報は時には洪水のように通り過ぎるだけに終わってしまいがちです。たった一つの思い出から、そのむこうに広がる自然の持つ懐の深さを垣間見ることがあります。たとえば私の愛読書にアン・モロウ・リンドバーグの「海からの贈りもの」があり、今回の下見で船浦の海岸で「つめた貝」の実物に出会いました。ある人は「月の貝」と呼び、アンは「島の貝」とよんでいます。もしもTさんがつめた貝の砂茶わんのことを教えてくれなければ、私にとってつめた貝は身近なものにならなかったでしょう。子育てをするための砂茶わん、卵のうがはじめて具体的に実を結んだ瞬間でした。見て、知る、喜びは、たった一つの出会いだけでも充分といえそうです。

おそらくこういう一瞬をどうぞ参加者に伝えられるような工夫を学芸員の方達にはしていただきたいと思います。観光ツアーでは味わえない博物館ならではの自然とのつきあい方を、秘境西表の「いま」、「ここで」を参加者は期待していると思います。

長々と書いてしまいました。あと二ヶ月で私の学習がどの程度進むものか怪しいものですが努力だけはしてみましよう。

M

M 様、西表合宿関係者の皆様.

ご意見ありがとうございます。みなさんが「真剣に合宿のことを考えているのだなぁ」と思うと、とってもうれしいです。以下に私の独断と偏見をご披露させていただきます。激し

い思いこみの上に論理が展開されていますので、自由につっこんでください。

>あまりに旅費が高く、磯での貝やカニや魚、植物だけの観察ではどうかというUさんの意  
>見も最もです。もっと安く行える和歌山あたりの海岸での合宿でもよかった筈です。しか  
>し、私達は西表合宿を決定し、これを希望する参加者がもうすでに定員を越えている現状  
>を考えると、改めて西表島の「いま」、「ここで」行う合宿の意義を考え直す必要があるよ  
>うです。

これは、私が最も腐心しているところです。例えば、西表で植物をみて、「わぁ、珍しいものがある」というふうに感じたとします。後で、その植物のことをよく調べてみると、「なんだ、大阪周辺でも見られるものじゃないか」というものが結構ありました。今回の下見でも評議員の方が私に名前を聞いた植物の1/3くらいは、「帰化植物」でした。もちろん、西表でしかみることのできない帰化植物もありますが、大阪でもみられる植物も含まれていました。また、下見後の浦内川で出会ったパーティーに名前を尋ねられた植物はシャシャンボ<sup>66)</sup>でした。つまり、大阪の自然を充分わかっていないと、(大阪と異なる)西表の固有性を発見するのは難しいという例です。

ただ、上述のことは私の杞憂かもしれません。参加者は「西表の固有性」を目的にしているわけではないんじゃないかという気がしています。ツメタガイの「砂茶碗」は大阪でもみれないことはありません。本州でも遠浅の砂地の海ならよく見るものです。しかし、Mさんの以下の文章にあるように、ツメタガイとの出会いが劇的で印象に残ったのは、「西表島の固有性」とは無関係です。出会いの場が西表島であることは事実であり、西表での生き物観察という「意気込み」がこうした出会いを演出してくれたと思います。本州でも同じものが見れるから、(コストが高い)西表に行く必要がない(あるいは西表で観察する必要がない)と考えるのは早計だと思います。

それと、自分が得る体験とそのためのコストとを天秤にかけるという考えは、私は嫌いです(そんな経済原理が合宿を対象に論じられるのなら、世話役すべての旅費を参加者に負担してもらおうという筋のような気がします)<sup>67)</sup>。

合宿下見を終えた今の私は、知識の洪水(種名を教えること)は必須のことではないと考えるに至っています。「マングローブ林内を自分の足で歩き、亜熱帯林の暗がりを体感する。サキシマハブの毒牙におびえて夜道をびくびく歩く。容赦のない陽光下をばてばての体を引きずって歩く」を経験してもらえば、西表までつれていった価値はあると考えます。これらのことは、ジェットボートや観光ツアーでは、ゆっくりと堪能できない部分です。

>しかし私は西表の「いま」「ここで」を共に感じ取るために、学芸員の方々に望みたい事  
>があります。専門の分野のことを説明する皆さんがどのように西表の「いま」「ここで」  
>を楽しんでいるかを伝えて欲しいのです。沢山の知識と情報は時には洪水のように通り過  
>ぎるだけに終わってしまいがちです。たった一つの思い出から、そのむこうに広がる自然  
>の持つ懐の深さを垣間見る事があります。たとえば私の愛読書にアン・モロウ・リンド  
>バーグの「海からの贈りもの」があり、今回の下見で船浦の海岸で「つめた貝」の実物に  
>出会いました。ある人は「月の貝」と呼び、アンは「島の貝」と呼んでいます。もしもT  
>さんがつめた貝の砂茶わんのことを教えてくれなければ、私にとってつめた貝は身近なも  
>のにならなかったでしょう。子育てをするための砂茶わん、卵のうがはじめて具体的に実  
>を結んだ瞬間でした。見て、知る、喜びは、たった一つの出会いだけでも充分といえそう  
>です。

私が西表について思っていること……

★正直に白状しましょう。私が合宿下見で皆さんに教えた植物の名前の半分近くを、本番では修正・訂正することになると思います。現在、下見で採集した標本を整理していますが、そういう感触です。つまり、私は西表についてなんにも知らないのです（今回採集した標本のすべての同定は、数年かかるでしょう）。

N先生がおっしゃられるような西表のプロは学芸員にはいません。私は、西表の植物について無知です（12年前に4日間ほど滞在したのが、私の知識のすべてです）。その点では、私も評議員の方もよく似たレベルです。ただ、専門分野について亜熱帯の一般的知識を少しばかり多く持っているにすぎません。

私が12年前（当時3回生）の西表で感じたことは「わからない、見ず知らずの生き物に満ちた異世界」というものです。この強烈な体験が植物分類学を大学院で専攻することになった大きなきっかけでもありました（1・2回生の頃は植物生態学を専攻するつもりだった）。つまり、12年前の私は、Mさんが今回の下見で感じたことと同様?の「西表の自然を眼前にして途方に暮れる」という経験をしたのです。そして、その衝撃は今も私の中で鮮明です。これは、評議員や参加者のみなさんも共感できることだと考えています。

……当時私が西表に行ったときの事前準備は全くありません。西表に行くことすら考えていなかったのです（琉球大で開催される生態学会出席というのが名目だった!）。「せっかく沖縄本島まで来たのだから、ついで行ってみよう」と考えて行っただけのことです。その意味では、Mさんに比べると何も準備をしていない中での西表島行きでした。

私が参加者のみなさんに伝えたいことは、「わからない、見ず知らずの生き物に満ちた異世界（西表の自然を眼前にして途方に暮れる）」のたった1点です。これは、私が西表合宿の意義に関して持っている価値観のすべてです。……ただし、これを理解するには（西表との比較対照として）自分の住んでいる周りの自然についてある程度の知識が要求されるのかもしれない。

思いこみばかりの話ですみません。Mさん、いかがでしょうか？

Fさま 西表合宿関係者の皆様

私のメールに丁寧に答えて戴いてありがとうございます。返事が遅れてしまいました。なにしろアナログ人間なので、手紙を投函して待ちわびる時間も私には貴重な時間配分なのです。私のメールはFさんの12年前の西表行の思い出を引き出せただけでも効果があったようです。

少し言葉足らずの部分を整理してこういう返事を考えてみました。

私達博物館を利用している人間はおおかれすくなかれ探し物をする時間の中にあります。探し物をしていることに気づいている人も気づいていない人も、そういう探し物をするステージを博物館に求めているような気がします。博物館の学芸員の皆さんは様々なフィールドを通して私達の気づきの場を援助しサポートしてくださっているように思えます。とりあえず一人立ちできない間は皆さんの色眼鏡を貸していただければ嬉しいのです。

「つめた貝」の例を引いたのは、その章のアンのメッセージは理解していたけれど、私は「つめた貝」そのものとはまだ出会っていませんでした。「砂茶わん」のことも言及されていませんでしたから、「つめた貝」と「砂茶わん」を結び付けることも出来なかったのです。船浦の海岸は私をワンステップ上げるステージを用意してくれていたのです。「つめた貝」がくっきりと立体的に立ち上がっていく瞬間を持たたのですから。Fさんが言われるように、それがたまたま西表であっただけの話です。本当は「ありふれた自然」も「貴重な自然」も思い掛けない出会いを用意しているものなのでしょう。その場所の遠いも近いも無縁と言えそうです。出会えた事実が大切なのですから。「探し物」とは案外なんでもないことなのかもしれません。

さて学芸員の皆さんや私達は動機も目的も多様な参加者の方と亜熱帯の森に包まれた西表の「いま」「ここで」を共有しようとしているのです。

もともと自然界は誰にでも開かれており、誰もが自分の全身を耳にして聴き、感じればよいのでしょう。何をひきだせるかも重要ではありません。「いま」「ここで」、静かに発酵す

るのに要する時間も様々はずでしょうから。

専門家ですら「西表の自然を眼前にして、途方に暮れる」のですから……。そうすると、案内人が唯一できることは、「何故植物分類学者となり、昆虫学者となり、地学屋となり、海洋生物学者となり、動物学者になったか」をさりげなく伝える事ではないでしょうか？

捜し物をしている私達にはまだ捜せない何かを、少なくとも選びとった皆さんからのささやかなアドバイス、メッセージを期待したいです。

合宿という宙づりされた時間の中で私達の捜し物をする熱意と研究者の情熱がぶつかりあう場所になれば、どんなに楽しい事でしょうか。

研究者のセンス・オブ・ワンダーが参加者の眠れるセンス・オブ・ワンダーにゆすぶりをかけるドキドキの場面に出会えれば嬉しいですね。

M

#### 註

- 1) 文部省生涯学習局社会教育課『平成11年度親しむ博物館づくり事業実施報告書』2000年、1-3頁。文部省生涯学習局社会教育課地域学習活動推進室『『親しむ博物館づくり事業』のねらいと参加体験型活動』『生涯学習空間』19, ボイックス, 1999年, 48-51頁。
- 2) 文部省「——『教育立国』を目指して——教育改革プログラム」1999年（以下のホームページを参照した。[http://www.monbu.go.jp/news/00000376/3.html#3\\_1](http://www.monbu.go.jp/news/00000376/3.html#3_1)）。
- 3) 例えば、染川香澄・西川豊子・増山均『こども博物館から広がる世界』たかの書房, 1993年。染川香澄『こどものための博物館』岩波書店, 1994年。目黒実『チルドレンズ・ミュージアムをつくろう』ブロンズ新社, 1996年。染川香澄・吹田恭子『ハンズ・オンは楽しい』工作舎, 1996年。
- 4) 例えば、1999年度の「親しむ博物館づくり事業」で選定された31実施機関の一つである大阪府立近つ飛鳥博物館学芸員の一瀬和夫は、「近つ飛鳥博物館——展示からハンズ・オンへの覚書き」（『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』3, 1998年, 67-78頁）の中で、エキスポラトリウムとボストン・チルドレンズ・ミュージアムの事例を検討し、自館での活動の参考としている。
- 5) 目黒, 前掲書, 24頁, 及び小野直紀「アメリカのチルドレンズ・ミュージアムの思想と展示・活動」丹青研究所『HANDS-ON MUSEUM——博物館における参加・体験型展示を考える』1999年, 99-148頁。なお、エキスポラトリウムに関しては、Hilde Hein, *The Exploratorium: The Museum as Laboratory*, The Smithsonian Institution Press, 1990, pp. 1-21, にこの間の事情が詳細に記述されている。
- 6) 竹内順一「第三世代の博物館」『冬晴春華論叢』第3号, 瀧崎安之助記念館, 1985年, 73-88頁。
- 7) 伊藤寿朗「地域博物館論——現代博物館の課題と展望」長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店, 1986年, 233-296頁。なお、博物館協議会委員への市民公募制度は、川崎市立の日本民家園・青少年科学館・大山街道ふるさと館・岡本太郎美術館、滋賀県立琵琶湖博物館などでの試みがある。また、2000年11月に開催された、日本博物館協会主催の全国博物館大会では、有名無実化している現在の多くの博物館協議会に、本来の意味での市民利用者の声を反映させる必要性が話題として取り上げられた。
- 8) 伊藤寿朗『ひらけ、博物館』岩波ブックレットNO.188, 1991年, 13頁。

- 9) 高橋雄造「科学技術博物館の歴史」『博物館学雑誌』第15巻第1-2合併号(通巻18号), 1990年, 3-19頁。
- 10) ティム・コールドトン(柴川香澄ほか訳)『ハンス・オンとこれからの博物館 インタラクティブ系博物館・科学館に学ぶ理念と経営』東海大学出版会, 2000年, 4-7頁。
- 11) 馬淵浩一『21世紀の科学館像 展示・運営に関する提言』ミュージアム出版, 1998年, 22-35頁。
- 12) 若月憲夫「体験学習施設としての科学館の発展経緯と今後の展望」『文環研レポート』第5号, 1994年, 株式会社乃村工芸社文化環境研究所, 1-6頁。
- 13) コールドトン, 前掲書, 7頁。
- 14) 日浦勇「人間と科学と教育の関係について」『博物館研究』第44巻第4号, 日本博物館協会, 1972年, 1-4頁。なお, 日浦の主張の原型は, 1964年にすでに当時の館長である千地万造によって提唱されている(千地万造「新しい地方博物館——とくに自然科学博物館の立場——」『大阪市立自然科学博物館館報』1, 1964年, 2-6頁)。
- 15) 芹沢俊介「自然史系中小博物館における教育活動の構成」『博物館学雑誌』第1巻第2号, 1976年, 1-10頁。
- 16) 以下, エクスプロラトリウムに関する記述は, Hein 前掲書による。
- 17) ロバート・オッペンハイマーは, 第二次世界大戦中, ロスーアラモスの原子爆弾研究所所長となり, 原子爆弾完成を指導した。
- 18) 椎名仙卓『日本博物館発達史』雄山閣, 1988年, 143-158頁。
- 19) 小林嘉宏「大正期における社会教育政策の新展開——生活改善運動を中心に——」『講座 日本教育史』編集委員会『講座 日本教育史』(第三巻)近代Ⅱ/近代Ⅲ, 第一法規出版, 1984年, 308-331頁。
- 20) 一記者「新設通俗博物館を観る」『帝国教育』再興第46号, 1912年, 61-62頁。
- 21) 椎名, 前掲書, 147-151頁, 及び一記者前掲論文, 61頁。
- 22) 棚橋源太郎「通俗教育館施設の現況及将来の計画」『帝国教育』再興第52号, 1913年, 55-60頁。
- 23) 棚橋, 前掲論文, 59頁。
- 24) 国立科学博物館『写真で見た国立科学博物館120年の歩み』財団法人科学博物館後援会, 1998年, 29-38頁。
- 25) 国立科学博物館, 前掲書, 192頁。
- 26) 田中聡『衛生展覧会の欲望』青弓社, 1994年, 97-121頁。
- 27) 犬塚康博「満州国国立中央博物館とその教育活動」『名古屋市博物館研究紀要』第16巻, 1993年, 23-62頁。犬塚康博「展覧会の肉声——この博物館はどこからやってきたのか そしてどこへ行くこうとしているのか」名古屋市博物館『新博物館態勢 満州国の博物館が戦後日本に伝えていること』1995年, 25-112頁。
- 28) 金子淳「博物館の『政治性』をめぐって——博物館史研究の方法論について思うこと——」博物館史研究会『博物館史研究』6, 1998年, 1-5頁。
- 29) 橋本裕之「物質文化の劇場——博物館におけるインタラクティブ・ミスコミュニケーション」『民族学研究』62-4, 1998年, 537-562頁。
- 30) 篠原徹「不思議な場としての博物館」岩井宏美編『民俗展示の構造化に関する総合的研究』(国立歴史民俗博物館民俗研究部)1988年, 25-33頁。
- 31) 海老原裕太『「トボス」としてのミュージアムの可能性——リレーションシップ成立の場を求めて——』『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』4, 2000年, 13-21頁。
- 32) 海老原, 前掲論文, 16-17頁。
- 33) 大庭脩「博物館と『生涯学習』」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』2, 1997年, 3-6頁。
- 34) 丹青研究所情報開発研究部「参加・体験型展示に関するアンケート調査報告——1999年度全国博物

- 館園アンケート調査より——」丹青研究所，前掲書，41-54頁。
- 35) 調査対象は1998年3月までに公開された博物館園のうち，丹青研究所が『ミュージアム・データ』誌を継続的に発送している館園から無作為抽出された。
  - 36) ここでは，「展示装置のボタンを押す」「パソコン端末のパネルにタッチする」等の回答は当該館園で記入された展示概要の記述をもとに（「参加・体験型展示」とは言えないと）判断した上で，集計の範囲外とされている。
  - 37) 石川貴敏・庄司麻美「国内の博物館における参加・体験型展示の諸相」丹青研究所，前掲書，1-40頁。
  - 38) 「演出型」がなぜ「参加体験型展示」と言えるのかについては，海老原裕太の次のような説明がわかりやすい。「歴史系の博物館においても，たとえば情景再現による過去の空間の擬似体験なども『参加体験』の一種と言えるだろう」海老原，前掲論文，16頁。
  - 39) 石川らは，シュミレータ展示を「実体験に近い擬似感覚が得られるものであり，エンターテインメント性が高い展示手法」としている。
  - 40) 石川らは，このバーチャル・リアリティ展示を，コンピュータ・グラフィックスを用い，仮想空間への没入感がシュミレータ以上に強い展示としている。
  - 41) 複合メディア劇場型展示や，3D映像と香りを組み合わせた事例等が紹介されている。
  - 42) 石川・庄司，前掲論文，32-38頁。
  - 43) 一瀬和夫「修羅展と古墳時代人——近つ飛鳥工房型展示完成をめぐって」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』5，2000年，39-52頁。
  - 44) 行田市博物館「学校巡回展示『忍城と城下町の人々の暮らし』事業」文部省生涯学習局社会教育課，前掲『平成11年度親しむ博物館づくり事業実施報告書』，38-43頁。
  - 45) 大阪府立近つ飛鳥博物館「古墳・飛鳥時代の衣装を着てみよう」文部省生涯学習局社会教育課，前掲『平成11年度親しむ博物館づくり事業実施報告書』，139-144頁。
  - 46) 千地万造「博物館づくり——歴史的経過と基本的な考察」『大阪市立自然史博物館館報』特別号，1975年，2-14頁（初出は日本博物館協会『博物館研究』第10巻第2・3号，1975年，2-14頁）。
  - 47) 山西良平「大阪市立自然史博物館普及教育活動の系譜」『大阪市立自然史博物館館報』18（平成4年度），1993年，1-4頁。
  - 48) 「大阪市立自然科学博物館後援会規約」大阪市立自然科学博物館『Nature Study』第1巻第1号，1955年，7頁。
  - 49) 「博物館後援会第2回総会（報告）」『Nature Study』第3巻第4号，1957年，9頁。「博物館についての陳情」『Nature Study』第3巻第1号，1957年，3頁。
  - 50) 筒井嘉隆「はじめに」『Nature Study』第1巻第1号，2頁。
  - 51) 前掲「博物館後援会第2回総会（報告）」，9頁。
  - 52) 千地，前掲論文，4頁。
  - 53) 「大阪自然科学研究会規約」『Nature Study』第4巻第5号，1958年，8頁。「博物館後援会第3回総会（報告）」『Nature Study』第4巻第5号，9頁。
  - 54) 山西，前掲論文，2-3頁。
  - 55) 千地，前掲論文，5-6頁。
  - 56) 筒井嘉隆「Nature Studyと博物館」『Nature Study』第2巻第10号，1956年，2-3頁。
  - 57) 千地，前掲論文，6頁。
  - 58) 千地，前掲論文，7-8頁。『大阪市立自然史博物館館報』23（平成9年度），1999年，31頁。なお後者では，「昭和34年——新館建設について本市社会教育審議会の意見具申」と記されている。
  - 59) 山西，前掲論文，3頁。
  - 60) 日浦勇「自然史ノート」『博物館研究』第15巻第5号，1980年，3-7頁。



瀧端：参加・体験型博物館における学習者の主体性に関する一考察

- 61) 大阪市立自然史博物館友の会副会長の西川喜朗氏からの聞き取りによる。
- 62) 那須孝悌「博物館における市民参加」(平成10年度東海地区博物館連絡協議会・講演)平成9年度愛知県博物館協会歴史民俗部門研修会担当館 一宮市博物館・名古屋市博物館『平成9年度愛知県博物館協会歴史民俗部門研修会の記録 活きている博物館——歴史系博物館のこれから——』愛知県博物館協会, 2000年, 101-113頁。
- 63) 大阪市立自然史博物館友の会「1999年度自然史博物館友の会総会議事資料」による。
- 64) 山西, 前掲論文, 4頁。
- 65) U氏から、「参加者自身も高額な交通費を払っているのだから、それに見合うだけのものにこの合宿はなりうるのか」という問題提起があったことを指す。
- 66) 大阪府下でもごく普通に見られるツツジ科の植物。西表島にもある。
- 67) 西表島での合宿に関して、世話役は交通費を自己負担した(大阪——石垣間の航空運賃は正規料金で片道4万円)。過去の友の会合宿では、世話役の交通費(下見を含む)は、参加者が支払う参加費から捻出していたため、今回の自己負担は異例なことであった。世話役はこの負担を許容した上で、今回の合宿の計画立案・実行に臨んでいた。F学芸員のここでの主張は、そもそも合宿はコスト・ベネフィットの論理で成立しているものではない、という趣旨である。

2000年11月27日 受理